

価値形態論における「商品語」について

— 『資本論』における物象化論の適切な理解のために —

一、問題の所在

これまでマルクスの物象化論については膨大な議論がなされてきた。とりわけ日本においては、『資本論』の商品章における物象化論についてテクストにもとづく綿密な研究が積み重ねられており、その理解は一様ではなく、論争も多岐にわたっている。とはいえ、「人と人との社会的関係が物象 *Sache* と物象との社会的関係としてあらわれる」という物象化概念の概括的な定義については概ね共有されているものとみられる。商品生産が全面化した社会においては私的生産者たちは孤立しており、商品をつうじてしか互いに関連できないがゆえに、生産者たちにとつては、それぞれの労働が人と人との直接的な社会的関係としてではなく、物象と物象との社会的関係としてあらわれる。こうした転倒した事態を指すために、「物象化」という術語を用いることは確かに適切であろう。だが、問題はこのような概括的定義をどのように解するかである。というのも、概括的な定義だけでは、物象化論の理論的核心を見失う恐れがあるからだ。じつさい、『マルクス・カテゴリー事典』の「物象化」の項目にお

佐々木 隆治

いては、先のような概括的定義がふまえられながらも、以下のように述べられている。

「マルクスは、あるものが関係の中においてはじめてある属性を獲得するにもかかわらず、それらの関係から独立にあるものがそれ自身でそれらの属性を備えているかのごとく人々が取り違えることを物象化とよんだ。」^②

このような物象化理解は比較的、人口に膾炙しているものだろう。だが、マルクスが実際にここでいう「取り違え」を物象化と呼んだことがあるのかという点を措くとしても、この理解には重大な問題がある。というのも、物象化概念をたんなる認識論的「錯視」の次元に切り縮めてしまっているからだ。すでに、岩佐茂や田畑稔らが指摘しているように、物象化概念は「錯視」という次元に収斂できるものではない。^③ 本来、物象化概念においては、生産物が物象として「主体」となり、逆に生産者が「客体」となるといふ事態が実践において存立することが含意されているはずだからである。^④ つまり、商品生産社会においては生産者たちが生産物を制御するのではなく、逆に生産物の運動が生産者たちを制御するという転倒が実践的關係において構造化されている。この転倒を生起せしめる実践的構造があるからこそ、認識論的次元での「錯視」が生じ、この「錯視」が実践における転倒をもたらず構造を支えるのである。物象化の定義からこのような「実践における転倒」の契機を排除するならば、資本主義的生産様式における転倒構造を根本において把握し、変革の現実的可能性を捉えることを目指したマルクス物象化論の肝が見失われかねない。物象化論が『資本論』全体において重要な軸を成す以上、この点は『資本論』全体の理解にとっても非常に重要である。

「錯視」の契機を一面的に強調した物象化論理解は、価値形態論の解釈において先に述べたような意味での実践的構造が見逃されがちであることも無関係ではないだろう。多くの価値形態論研究においては形態そのものに関心が集中するために、形態と不可分の連関を持つ労働がその形態においてどのように編成されるのかという

点の考察が軽視される傾向があった。マルクスの物象化論が本格的に展開される第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」が第三節の「価値形態または交換価値」を理論的前提としている以上、物象化論にとってもこの点をどう理解するかは決して些事ではない。もちろん、価値形態論の課題は商品がなぜ一般的等価形態を、すなわち価格を必然的に持つのかを説明する点にあり、物象化論が本格的に展開されるわけではない。しかし、価値形態論では価値表現関係そのものの考察に限定されているとはいえず、すでに物象化論にとって不可欠な契機が展開されている。なかでも見逃されがちであったのが、価値形態論において価値形態と価値実体たる労働の「必然的連関」がどのように論じられているか、ということなのである。⁵⁾

本稿ではこの点を、価値形態論における「商品語 Warensprache」の比喩に焦点をあてて考察することにした。 「商品語」の比喩は難解であり、それゆえ既存の価値形態論研究においても少数の例外を除いてほとんど検討されてこなかった。だが、その比喩の解釈は、価値形態と価値実体の必然的連関、ひいては価値形態論全体の理解にとって決定的な重要性を持っていると考えられる。

「商品語」の比喩は、『資本論』第一巻第一章第三節のなかの「相対的価値形態の内実」における以下の一節で述べられている。

「商品価値の分析がさきにわれわれに語つたいたさいのことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語 Warenspracheで、その思い Gedanken を打ち明けるだけである。労働が人間の労働という抽象的屬性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルと等しいものとして通用する限り、したがって価値である限り、リンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの崇高な価値対象性が

リンネルのぎこちない身体とは異なっているということを言うために、リンネルは、価値が上着に見え、したがってリンネル自身が価値物 *Wertding* としては上着と瓜二つであると言う。(MEW 23.66)

もちろん、マルクスの物象化論を少しでも知っている者なら、商品自身が自ら語るといふこの比喩が物象化となんらかの関連をもつことはすぐに理解できるだろう。しかし、ここでの解釈の困難はそのような理解だけで解決されるものではない。

というのも、ここでは、リンネルが話す商品語は「自分だけに通じる言葉」であるとされているからだ。およそ言語というのは他者との関係においてはじめて存在しうると考えるのが普通であろう。しかし、ここでリンネルが語る言葉は、リンネルが他の商品と交わりを結ぶことで初めて語られるとはいえ、あくまでリンネル自身にしか通じない。しかも、にもかかわらず、リンネルはその「思い (*Gedanken*)」を「打ち明ける」というのである。「商品語」の比喩を解読するためには、この奇妙な表現の意味を考えなければならぬ。⁽⁶⁾

さしあたり、以下では、この「商品語」の解読の前提となる「相対的価値形態の内実」の考察から始めることにしたい。

二、「相対的価値形態の内実」について

「相対的価値形態の内実」(いわゆる「内実論」)は、価値形態論のなかでも最も解釈がわかれ、様々な論争が行われてきた箇所であり、ここを解釈し尽くすには様々な論点に入り込まざるを得ない。だが、本稿のさしあたりの課題はあくまで「商品語」の謎を解くことであるから、まずはそれとの関連で必要とされる範囲で「内実論」

を検討していくことにしよう。この「内実論」においてマルクスは、「二〇エレのリンネル＝一着の上着」「二〇エレのリンネルは一着の上着に値する」というもつとも簡単な価値表現関係がどのような「内実」をもつのかを検討している。

(1) 「価値物 Wertung」について

マルクスは「内実論」の冒頭において、価値表現について考察するためには、さしあたり量的関係を捨象し、質的關係を考察しなければならないことを指摘し、「リンネル＝上着が等式の基礎」であることを確認する。そして、第三段落において、この等式においてはリンネルの価値だけが表現されるのであるが、それはどのようにしてか、という問いを立てて、こう答える。

「リンネルが、その「等価物」としての、またそれと「交換されうるもの」である上着にたいしてもつ関連によって、である。(A) この関係のなかでは、上着は、価値の実存形態 Existenzform として、価値物 Wertung として、通用する。(B) なぜなら、ただそのようなものとしてのみ、上着はリンネルと同じものだからである。(C) 他方では、リンネルそれ自身の価値存在が現れてくる、あるいは、ひとつの自立的表現をうけとる。(D) なぜなら、ただ価値としてのみ、リンネルは、等価値のものとしての、あるいは、それと交換されうるものとしての上着と関連しているからである。」(MEW23,64)〔A、B、C、Dの記号は引用者〕

まず、最初の一文においては、リンネルが「等価物」としての上着、言い換えれば、リンネルと「交換されうるもの」としての上着と関連することによって、リンネルの価値が表現されることが言われる。このこと自体はすでに価値形態論の冒頭で確認されている内容の繰り返しに過ぎない。問題はリンネルが「等価物」としての上

着とどのように関連することによって価値を表現しているのかなのであり、後に続く文章においてこのことが以下のように語られる。

リンネルが自らに「等価物」として上着を等置するというこの関係においては、「上着は、価値の実存形態 Existenzform」として、価値物 Wertding として通用する」。この段落において、最も解釈が分かれるのが、ここである。というのも、ここでの「価値の実存形態 Existenzform」「価値物 Wertding」をいかに解釈すべきかをめぐって長らく論争が繰り広げられてきたからである。つまり、「価値物」概念を等価形態に位置する、すなわち等価物の役割を果たす商品だけに与えられる形態規定と捉えるのか否か（形態規定として捉える場合、後に登場する「価値体 Wertkörper」⁷⁾という概念と同義であることになる）、という論争がそれである。だが、マルクス自身に即するならばこの問題は自ずと解決されるだろう。マルクスは価値形態論の冒頭部分でこう述べている。

「商品体のがさがさした対象性とは正反対に、一原子の自然素材も商品の価値対象性には入り込まない。したがって、一つ一つの商品を好きなだけひねくり回しても、それは価値物 Wertding としては捉えようがないものであるままである。」(MEW23:62)

この文章を素直に解釈すれば、「価値物」とは価値対象性をもつ物のことを指す概念、あるいは商品を価値対象性という属性から捉えた概念に他ならないだろう。また、第四節「商品の物神的性格とその謎」においても、次のように述べられている。

「労働生産物はそれらの交換の内部ではじめて、それらの互いに感性的に異なる使用対象性から区別された、社会的に同等な、価値対象性を受け取る。有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂がはじめて実際に発現するのは、有用物が交換をめあてに生産されるまでに、したがって、諸物の価値性格がそれらの生産そのもの

において考慮されるまでに、交換が十分な広がりと重要性を獲得したときである。」(MEW2387)

ここでも使われ方は同じである。「有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂」という句は、直前の文章の言い換えであり、ここでは、感性的に異なる使用対象性とは区別される社会的関係から生じる価値対象性について論じているからだ。

もちろん、概念は文脈によって異なった意味で用いられるものであるから、以上の検討のみによって、第三段落における「価値物」が同じ意味で使用されていると直ちに結論することはできないだろう。だが、第三段落は以上のようなマルクス自身の語義を踏まえることによってこそ、クリアに理解することができる。というのも、先に検討した文章(A)に続く文章(B)においてマルクスはこう述べているからだ。「なぜなら、ただそのようなものとしてのみ、上着はリンネルと同じものだからである」。ここでの「そのようなもの」とは、もちろん、「価値の実存形態」、その言い換えである「価値物」のことを指す。だとすれば、文章(B)は、価値物を価値対象性を持つ物と捉えるのでなければ、把握し得ない。ここでのリンネルと上着の質的同等性は、価値という属性を持つという点にあるからである。逆に、価値物を価値形態規定を含蓄する概念として捉えるならば、上着はリンネルと「同じもの」ではありえないであろう。価値形態とは、まさにこの等式におけるリンネルと上着の両極的性質によって成り立っているからである。

以上の「価値物」概念の解釈を踏まえるならば、(A)(B)は次のように解釈される。上着は価値物として、すなわち価値対象性を持つ物としてはリンネルと同じであり、それゆえに、この関係の内部では上着は価値物として通用する。つまり、この等式関係において上着がリンネルに等置されるのは、それが価値物であるという資格においてのみであり、その資格において上着はリンネルにたいして受動的に対置されているに過ぎない。言

い換えれば、ここでは上着であれズボンであれ、価値対象性を持つ物が対置されさえすればよいのであり、上着が上着として問題になっているわけではない。ゆえにこの関係の内部においては上着は価値物としての意義しか持たず、価値物としてのみ通用する、ということ述べているのである。

しかし、ここで気を付けなければならぬのは、この等置関係が成り立つ以前から、リンネルや上着が価値物であったわけではない、ということだ。というのも、すでにみたように、「労働生産物は、それらの交換の内部ではじめて、それらの互いに感性的に異なる使用対象性から区別された、社会的に同等な、価値対象性を受け取る」からであり、これを価値形態論の文脈において言い直せば、リンネルが上着を自らに等置することによって、はじめに価値対象性を受け取る、ということに他ならない。しかし、だからといって価値対象性を交換関係、あるいは価値関係の内部からだけ生じると考えるのもまた間違っているだろう。というのは、価値の实体は抽象的人間労働であるからだ。確かに後で見ると考えるのもまた間違っているだろう。というのは、価値の内部になれば現出しえない。とはいえ、それが価値関係の内部において現出しうるには、他人にとっての有用物を生産する現実の人間労働が行われていなければならない。この現実的实践を基礎にしてこそ、価値関係の内部において物は価値対象性を持つのである。逆に言えば、この実践を基礎とせずして、任意の物をリンネルに対置したところで、それは価値関係を形成することはできない。あくまで、他者にとつての有用物を生産する人間労働という実践を基礎として、その労働によって生産された物が価値関係の内部において価値対象性を持ちうるのである。だから、(A) (B) においては、リンネルと上着の質的同等性の条件が「価値物」であることを指摘することによって、価値関係の基礎にこうした実践的關係があることも示唆されていることになるだろう。

さて、以上の解釈を踏まえるならば、(C) (D) は次のように解釈されるだろう。先に確認したように、この

価値関係においてはリンネルと上着に共通な価値物としての性格が両者の質的等置を可能たらしめる。だが、上着が価値物としての同等性という資格においてリンネルに受動的に対置されるがゆえに価値物としての意義しかもたないのにたいし、リンネルはまさにリンネルとして取り上げられているのであり、このリンネルがただ価値としてのみ、つまり自らの価値性格を表現するためにだけ、能動的にたんなる価値物としての上着と関連する。それによって、リンネルの価値が上着によって表現され、リンネルは自らの価値の自立的表現を獲得するのである。

注意しなければならないのは、ここでは、まだ価値形態の違いによる役割の違いが端的に指摘されるだけで、価値形態による規定性が詳細に検討されているわけではない、ということだ。ここで力点が置かれるのは、むしろ等式の現実的基礎である労働実践と価値関係における形態規定の必然的連関を示すことである。¹⁰⁾ そうでなければ、なぜ価値実体が形態において表現されるのかを理解できないからである。「価値物」を形態規定として理解するのでは、この価値の実体と形態の必然的連関を見落としてしまうことになるだろう。形態規定の詳細な検討については、この基本的な連関を解き明かした後、第七段落以降で行われる。

(2) 「回り道」について

「内実論」において最大の論点になってきたのは、第五段落の「回り道 Umweg」をいかに解釈するかということであった。¹⁰⁾ というのも、第五段落のマルクスの叙述それ自体はけっして難解とは言えないが、それによって何を言わんとしているかは必ずしも明確ではないからであり、しかもその解釈が「内実論」全体の理解に関わってくるからである。

マルクスは第五段落において次のように述べている。

「(E)たとえば上着が価値物としてリンネルに等置されることによって、上着にひそんでいる労働がリンネルにひそんでいる労働に等置される。(F)ところで、たしかに上着を作る裁縫は、リンネルを作る織布とは異なる具体的労働である。(G)しかし、織布との等置は裁縫を、両方の労働において現実に等しいものに、人間的労働というそれらに共通な性格に、実際に *factsächlich* 還元する。(H) *Sonst dann*、この回り道 *Umweg* を通って、織布もまた、それが価値を織り出す限りでは、裁縫から区別される特徴を持たず、したがって抽象的人間的労働であることが語られるのである。(I)ただ異なった商品の等価表現だけが、異なった商品にひそんでいる異なった労働を実際にそれらの共通物に、人間的労働一般に還元することによって、価値を形成する労働の特殊な性格を出現させる。」(MEW23,65) [(E)などの記号は引用者]

裁縫(上着)を主題とする(E)(F)(G)から織布(リンネル)を主題とする(H)への流れからも推察されるように、第三段落で分析した事態が労働の次元から捉えなおされていることがわかるだろう。問題はそことでこの段落で何が言われているかである。先に見たように、第三段落においては、上着は価値物という資格においてリンネルに等置されるのだから、その関係の基礎には人間的労働としての同源性が前提されていた。第五段落ではむしろ、第三段落を踏まえた上で、価値関係によって現実的实践における労働がいかにして人間的労働という規定性を「実際に *factsächlich*」与えられるのか、その論理が分析されていると考えてよい。

(E)において、価値関係が成立することによって、裁縫が織布に等しいという関係に置かれることが指摘される。先に見たように、この価値関係の基礎には労働という実践的關係があるからだ。もちろん、現実には裁縫と織布はそれぞれ異なる行為によって異なる有用性を産出する異なった実践でしかない。しかし、(G)で言われ

るように、上着がただ価値物としてのみリンネルに受動的に等置されるこの関係においては、上着をつくる裁縫という労働は裁縫と織布に共通する人間的労働という意味しかもたないのであり、そのような規定性を「実際に」与えられる。逆に言えば、この関係の外では裁縫は潜在的に人間的労働であるだけである。しかし、この単なる有用的生産行為が、その結果としての生産物が価値関係にはいることによって、その有用的労働としての側面を捨象される一方、ただ頭脳の抽象によって析出されるしかなかった人間的労働という意義を「実際に」獲得するのである。これが、ここでの「還元」の意味である。

そして、「その *was dann*」⁽¹⁾、織布の側から見れば、リンネルが上着との価値関係に入ることによって、織布はただ価値形成活動という同質性においてのみたんなる人間的労働としての裁縫と連関するのであり、それによって、織布が価値を織り出す労働であるかぎりで、裁縫と同じ労働、すなわち人間的労働であることが「語られる」。このようにして、価値表現は、「異なった商品にひそんでいる異なった労働を実際にそれらの共通物に、人間的労働一般に還元する」のであり、それによって「価値を形成する労働の特殊な性格を出現させる」のである。つまり、価値表現における価値関係が、潜在的に一般的労働としての属性を持っているに過ぎない有用労働に、人間的労働としての規定性を実際に与える。以上が、この段落で述べられる内容である。

では、「回り道」とはここで何を意味するのだろうか。以上の解釈を踏まえれば、次のように解することができるだろう。みてきたように、ここでは、裁縫が織布に對置されることでもっぱら人間的労働としての意義を与えられるのであり、そのさい、「この回り道」をつうじて織布も人間的労働に実際に還元される、ということが言われている。残る問題は、「この回り道」が指す内容をどうとるかということであるが、第五段落で強調されるのは織布労働の人間的労働としての性格が裁縫と等置されるといふ価値関係の内部ではじめて現出しうるのだという

ことであるから、織布に裁縫を等置し、価値関係の内部に置くということが「回り道」の内容だと考えるのが妥当であろう。もちろん、この場合、織布に裁縫が等置され、裁縫が人間的労働に還元されることによって、織布の人間の労働としての性格が現れるという点が否定されるわけではない。論理構造としては、やはり裁縫が人間的労働に還元され、織布がその人間的労働としての裁縫に関連することによってしか、織布の人間の労働としての性格は現出し得ないからだ。しかし、そのことが言われるのは、あくまで価値及び価値性格は他の商品およびその商品を作り出す労働との関連によってしか、現れることができないうことを強調する文脈においてなのであり、「回り道」もこの文脈に沿って解釈されるべきであろう。

なお、第三段落および第五段落の意義について補足しておく。第三段落においては、価値物という規定を商品に与える人間的労働は明示的に語られず、「価値物」という概念をつうじて示唆されるにとどまっていたが、第五段落においては労働が主題的に取り扱われ、それぞれの商品を生産する労働がいかにして抽象的人間労働という規定性を実際に与えられるのが説かれる。第三段落が主として価値の実体がいかにして価値関係のなかで表現を獲得し、価値存在を現出させるのかについて展開していたとすれば、第五段落では価値関係が価値の実体なすところの人間の労働をいかに現出させるかを展開しているのである。つまり、前者においては労働実践を基礎にしてはじめて価値関係が成立し、そこで必然的に価値表現関係が成立すること、その価値表現関係は労働という現実的实践に支えられていることが語られるのに対し、後者においては逆に価値関係が、そしてその価値関係における価値形態が必然的に労働を現実の規定することが述べられる。そしてまた、その規定された労働が、価値関係の基礎となっているのである。このような価値の実体と形態の必然的な実践的連関が述べられているのが第三段落から第五段落への流れである。本稿では詳しく説明することができないが、これにたいしてこの後の第

七段落から第九段落においては、こうした商品生産関係において必然的に成立する実体と形態の連関を前提とした上で、価値形態規定がより詳細に与えられ、人間の意識にたいして商品の物神的性格が発生するメカニズムの基礎が述べられることになる。

したがって、「相対的価値形態の内実」においては互いに密接に関連するものの、区別されうる二つの論理、すなわち第三段落から第六段落にかけて展開される論理と第七段落から第九段落にかけて展開される論理が存在することが理解できよう。第十段落の「商品語」の比喩はまさにこの前者の論理と関わるのである。他方、後者は第十一段落において「商品Bの身体が商品Aの価値鏡になる」(MEW.2367)と述べられて総括される。「回り道」を価値表現における回り道とする通説は、この二つの論理の存在を見落とし、混同することから生まれてきた解釈に他ならない。

三、「商品語」とはなにか

「商品語」をめぐる一節を再掲する。

「商品価値の分析がさきにわれわれに語ったいっさいのことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語で、その思いを打ち明けるだけである。(a)労働が人間的労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルと等しいものとして通用する限り、したがって価値である限り、リンネルと同じ労働から成り立っていると言う。(b)リンネルの崇高な価値対象性がリンネルのぎこ

ちない身体とは異なっているということを言うために、リンネルは、価値が上着に見え、したがってリンネル自身が価値物としては上着と瓜二つであると言う。(MEW2366)〔記号は引用者〕

まず、商品の「思い」と商品語で語られる内容の関連から考察していこう。(a)においては、「労働が人間的労働という抽象的屬性においてリンネル自身の価値を形成するということ」という「思い」を伝えるために、リンネルは商品語で「上着がリンネルと等しいものとして通用する限り、したがって価値である限り、リンネルと同じ労働から成り立っている」と言う、ということが述べられている。これは、先に考察した第五段落の内容に対応するものである。つまり、商品語によって語られる内容は上着がリンネルに等置されるという価値関係が労働に与える規定性であり、「思い」はそれによって実際に現出する人間的労働の価値形成性格に対応する。また、(β)においては、「リンネルの崇高な価値対象性がリンネルのぎこちない身体とは異なっている」が「思い」であり、「リンネルは、価値が上着に見え、したがってリンネル自身が価値物 Wertding としては上着と瓜二つである」が語られる内容であるが、これは第三段落に対応している。つまり、語られる内容は価値関係による価値形態の端的規定に対応し、「思い」は価値に対応している。したがって、商品次元、労働次元という違いはあれ、商品語において価値関係による規定性が語られることによって、商品の「思い」である価値(あるいはその実体)が現出することが述べられていることになるだろう。

だとすれば、「商品語」という比喩は何を意味しているのか。

商品語で語られるのは、価値表現関係による規定性であり、その規定性をつうじてリンネルの価値存在が現れ、織布の価値形成性格が現出するということである。この内容は、リンネルと上着との関連によって語られるのであるから、「リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである」と言われるので

ある。しかし、リンネルはこのとき上着と関係することによって語るのであるが、その内容を上着にたいして語るのではない。むしろ、リンネルは上着によって語るのだ。というのは、ここでは上着はたんなる価値物としての意義しか持たないからであり、その限りでのみリンネルに受動的に等置されているからだ。つまり、リンネルが自らの価値表現のために能動的に上着に関係することで、上着はリンネルにとって自らの価値存在を表現するための「言語」となる。リンネルは自らの「思い」を「思い」のままに表出することはできない。あくまで上着と関係し、上着を「言語」にすることによってしかそれを語れないのである。その意味で、人間と同様に、商品の精神もはじめから「物質に取り憑かれている」¹²⁾。

だが、人間と違って、商品にあつては関係を取り結ぶ相手自体が自分にとっての「言語」になるのであり、それゆえそれは「自分だけ」にしか意味をもたない。また、それは価値表現関係をあえて批判的に捉え、その存立の必然性を分析しない限りは、人間にも理解できないだろう。なぜならば、商品生産社会における諸個人にとつては、リンネルが上着との関連によってしか語ることができないということとじたいがリンネルの語りの内容を覆い隠すからである。つまり、商品生産社会においては労働が私的であり、諸物象を媒介することでしか一般性を獲得できず、また、互いに関連することができないがゆえに、人間は労働の諸連関が形成されていることを見取ることができない。その結果、人間は、リンネルが上着と関係することによって語ろうとした「思い」を聞き取ることができなくなってしまう。かくして、商品語は「自分だけ」にしか通じないのであり、それによる語りはモノローグでしかない。商品語は、リンネルが自らの価値を現出させ、織布労働の人間の労働としての性格を確証するためにだけ語られるのであり、それ以外の意義を持たないのである。

とすれば、マルクスが商品語という比喩を使った意味もみえてくるだろう。これまでの分析が明らかにしたよ

うに、孤立した人間たちが商品を生産し交換しあう商品生産関係においては、個々の人間の主観的意志とは関わりなく、生産物が人々の諸実践を基礎として社会的力を獲得し、その社会的力が人々の実践を規制し、編成する一定のメカニズムが存在する。マルクスは『資本論』初版においてもこう述べている。

「彼らの生産物を互いに商品として関連させるために、人間たちは彼らの相異なる労働を抽象的人間労働に等置することを強制される。彼らはそれを知らないが、物質的な物を価値という抽象に還元することによって、それを行う。これは彼らの脳髓の自然発生的な、したがって無意識的な、本能的な働きであり、この働きは彼らの物質的生産の特殊な様式から、そしてこの生産が彼らをその中に置くところの諸関係から必然的に生育する」(MEGA, II-546)

たとえば、リンネル生産者が上着生産者との交換を行う場合には、生産者の意図とは関わりなく、リンネルを上着との価値関係におくことによつて上着に等価形態を与え、上着をつくる裁縫労働を一般的に通用する人間労働に還元するのであり、これとの等置つうじてリンネルをつくる織布労働を一般的な人間労働として通用させることになる。つまり、価値関係をなす商品の諸連関が物象を媒介とした私的労働の連関を作り出し、私的労働を抽象的人間労働として通用させ、抽象的人間労働として通用するそれらの私的労働が商品価値の実体となる、という連関が必然的に成立する。だが、これは人間の主観的意志にもとづいて意図的に作り出されるのではない。むしろ、商品交換において「人間たちは彼らの相異なる労働を抽象的人間労働に等置することを強制される」のであり、「彼らはそれを知らない」。もちろん、商品交換はすぐれて意識的な行為である。だが、人間たちはまさにその意識的行為において、無意識的に「物質的な物を価値という抽象に還元」し、私的労働の諸連関を作り出すことを「強制される」。ここに、人間たちの意識的な活動が、彼らの意志からは独立した一定の必然的な連関構

造として立ち現れるという転倒が成立するのである。ここでは、人間たちの生産や交換という主体的活動が、その活動自身が作り出す構造によって規定され、制御される。マルクスは『経済学批判要綱』においてこう述べている。「これらの運動の個別的諸契機が諸個人の意識した意志や特殊な諸目的から出発すればするほど、過程の総体はますます自然発生的に成立する客観的連関として現れ、たしかに意識した諸個人の相互作用から生じるのであるが、彼らの意識のうちにもなく、全体として彼らに服属させられることもない客観的連関として現れる」(MEGA, II, 126)。

このような価値の実体と形態の連関を必然化する構造、すなわち人間の意識的な諸実践が構築するにもかかわらず、あたかも人間にとって「客観的」に作用するかのような「商品世界」固有の論理を強調して表現するために、マルクスは「商品語」という奇妙な比喩を採用したのである。リンネル生産者は商品交換において自ら「思い」を語ることができず、リンネルに上着を等置することでリンネルに「思い」を語らせることを強制される。だが、このようにリンネルに語らせることを彼は無意識のうちに行うのであり、それを聞き取ることはできない。「商品語」の比喩はこのようにして、意識的な人間の活動が、無意識のうち人間の意志からは独立した価値の実体と形態の必然的な構造、すなわちあたかも商品を実体とするような「商品世界」固有の論理を作り出し、ここにおいて主体と客体の転倒が起こることを表現するものに他ならない。

それゆえ、「商品語」という比喩に賭けられているのは、たんに生産物が人間から独立に運動し、人間を支配するという意味での転倒ではない。そもそも「生産物が人間と独立に運動して支配する」という認識じたいが、この「実践的構造」そのものから説明されるべき一つの転倒であろう。当然だが、生産物が独りで運動することはありません。むしろ、そこで言われるのは、人間の意識的行為が人間の行為を規制し、制御する実践的構造を

無意識的に成立させるといふ逆説なのである。交換過程論とは違って価値形態論においては交換者の欲望が捨象されているとはいえ、「リンネル＝上着」という価値表現等式にリンネル生産者の視点が前提されている以上、その意識的契機なしにはこの等式は成立しえない。だが、そうであるにもかかわらず、この等式においてリンネル生産者は自らの私的労働の一般的かつ社会的な性格を確証することを自覚的にはできず、その確証を商品の価値表現関係をつうじて無意識的に行うことを強制されるのである。

したがって、「商品語」は、第四節「商品の物神的性格とその秘密」における商品の語りとは異なっていることに注意しなければならない。

「諸商品が話すことができる」とすれば、こう言うであろう。われわれの使用価値は人間にとって興味をひくかもしれない。それは物としてのわれわれには属さない。そうではなく、われわれに物的に属しているものは、われわれの価値である。商品としてのわれわれ自身の交通がそのことを証明している。われわれは自分たちをただ交換価値として互いに関連させ合うのだ、と。」(MEW2397)

ここでの語りはリンネルによるモノログではなく、諸商品による人間への語りかけである。つまり、商品語ではリンネルが「自分だけに通じる言葉」で「思いを打ち明ける」のに対して、ここでは諸商品が語り手となって諸商品以外の存在に、すなわち人間に語りかけている。それゆえ、この比喩は、人間労働の一般的かつ社会的な性格が物としての商品それじたいの属性として現れ、現実の関係が人間にとって転倒して見えることを表現しているのである。それは、マルクスはこの引用の直後に、「経済学者」がこの「商品の魂」を魂通りに聞き取っていることを確認していることから明らかだろう。同じ物象化を表す比喩といっても、交換行為のうちに無意識に形成される、諸個人の主観から独立した連関を強調する「商品語」の比喩とは語られている次元が異なってい

る。

だが、この語りかけは、商品語の論理と無関係ではない。というのも、商品語の論理が人間の脳髓に映し出されたものが、ここでの語りかけに他ならないからである。人間の意識的行為に媒介されるにもかかわらず、その主観的意志から独立に、強固に実践を構造化する関係が基礎にあるからこそ、価値形態が人間にたいして「社会的自然」¹³⁾として現象するのである。マルクスは『資本論』初版の先の引用部分に続いて次のように述べている。

「第一に、彼らの関係は実践的に定在する。第二に、しかし、彼らは人間であるのだから、彼らの関係は関係として彼らにとって定在する。この関係が彼らにとってどのように定在するか、あるいは彼らの脳髓にどのように反省するかの様式は、その諸関係そのものの本性から生じる」(MEGA, II, 546)

第一の点において述べられる実践的に定在する関係とは、「内実論」の文脈で言えば、まさに商品語の比喩において表現された、人間の活動が無意識的につくりだす実践的關係として捉えてよいだろう。だが、第二の点で述べられるように、人間たちにとってはこの実践的關係はただ定在するのではなく、実践的關係のなかにいる人間たちとこの実践的關係との関係としてしか定在しない。つまり、人間たちは自らを取り巻く実践諸関係による制約のなかでしか、その関係を彼らの脳髓に反省させることができない。それゆえ、この反省の「様式」は「その諸関係そのものの本性から生じる」のである。たとえば、商品生産社会という転倒が現実に構造化された社会に生きる人間たちにとっては、諸商品の連関をつうじて獲得される私的労働の一般的かつ社会的な性格が、商品それじたいの社会的威力として現れ、さらにはその社会的威力が商品身体と癒着して現象することになる。この第二の点は、「内実論」の文脈では第七段落から第九段落で述べられていると考えてよい。

この引用部分から明らかのように、マルクスにおいては第一の次元での実践的關係における転倒が現にあるか

らこそ、第二の次元での諸関係の脳髓への反映における転倒が起こるのである。われわれはこのプロセスの総体を物象化として把握しなければならぬ。もし「錯視」の契機だけを考察するのであれば、第一の次元での転倒の重要性を見落としてしまい、物象化の全体構造を捉えることができなくなってしまう。むしろ、第二の認識論的次元での転倒もそれが実践にもとづく必然性と強固さをもつ限りでは、実践の次元での転倒を生み出す実践的關係を支え、その一部をなすであろう。しかし、マルクスにとっては、あくまで認識論的次元での転倒を実践的關係の次元から捉え返していくところに、物象化論の核心があった。なぜならば、マルクスの眼目は「物象化的錯視」を暴いて「真の社会関係」を把握することではなく、何よりも物象化の必然性を捉え、変革実践の可能性を物象によって編成された現実そのものうちに見いだすことにあるからである。¹⁴

四、結論

労働生産物を商品として交換しあう社会においては、それぞれの具体的な私的労働は必然的に物象の關係をつうじて人間的労働として確証され、そういうものとして実際に編成される。もちろん、この事態がその意識に物象をつうじてしか現象しえない人間たちは、この「商品世界」固有の論理を「知らない」。しかし、にもかかわらずこのメカニズムの中でそれを支える実践を日々「行う」のである。マルクスがここで強調するのは、無意識に構成される価値関係およびそこから必然的に生じる価値形態の拭いがたい現実的力なのであり、その現実的力が他ならぬ現実の諸実践に支えられているがゆえに強力であることなのだ。このような意味で、商品語の比喩は、人間の行為をつうじて無意識的に人間の実践を規制する必然的メカニズムが成立するという実践的な転倒を表現

するものに他ならない。いわゆる「取り違え」や「錯視」はこの実践的な転倒の基礎のうえに起こるのであって、その逆ではない。それゆえ、『資本論』の物象化論を総体として把握しようとするならば、商品語の比喻で述べられた論理を決して見落としてはならないのである。

(1) 平子友長が指摘するように、「ある対象⇨客体は物象的な社会的関係の担い手として考察されるとき、物象と規定される」(『社会主義と現代世界』青木書店、一九九一年、一九二頁)のであるが、通説的解釈ではこのことが意識されないことも少なくない。

(2) マルクス・カテグリー事典編集委員会『マルクス・カテグリー事典』青木書店、一九九八年、四四二頁、項目「物象化」(石塚良次)。

(3) 岩佐茂「『物象化』概念の認識論的反省」『唯物論研究』第八号および田畑稔『マルクスと哲学』新泉社、二〇〇四年、第八章を参照。

(4) 平子友長「マルクスの経済学批判の方法と形態規定の弁証法」『科学の方法と社会認識』汐文社、一九七九年および田畑、前掲書、第八章を参照。

(5) マルクスは『資本論』初版でこう述べている。「決定的に重要なことは、価値形態、価値実体、価値量のあいだの内的な必然的連関を発見することである」(MEGA, II-5:43)。以下、*Marx/Engels Werke*, Dietz Verlag. からの引用については *MEW/ Marx/Engels Gesamtausgabe*, Dietz Verlag. からの引用については *MEGA* と略記し、それぞれ巻数と頁数を付記する。『ドイツ・イデオロギー』については廣松版(廣松渉編、河出書房新社、一九七四年)を利用し、これについては日と略記し、頁数を付記する。

- (6) 商品語の意味について比較的詳細に検討したものととして、廣松渉『資本論の哲学』勁草書房、一九八七年および飯田和人『市場経済と価値』ナカニシヤ出版、二〇〇一年があるが、この点について前者は全く検討しておらず、後者も「この反省運動の主体だけに通ずる『言葉』でそれ〔反省〕がなされてもまったく問題はない」(前掲書、二二九頁)という消極的解釈を与えているだけであり、その積極的意味の解明にまでいたっていない。
- (7) 山内清は「価値体」概念をこう定義している。「価値体とは、「抽象的人間労働の感覚的に実在する体化物 *sin-nlich existierende Materiatnr der menschlichen Arbeit in abstracto*」(『初版』二二)であり、(その自然形態がそのまま価値を表現するもの)として、等価形態にある商品(上衣)にのみ関する規定であり、価値関係を媒介にはじめて生じる形態上の規定である」(山内清『価値形態と生産価格』八朔社、一九九九年、一二五頁)。
- (8) 久留間鮫造がはじめて指摘したように、価値形態論においては交換関係一般が扱われているわけではなく、商品交換に必然的に伴う価値表現関係に限定した考察がなされており、ここでは商品所有者の欲望はそれじたいとして捨象されている。
- (9) 飯田和人はこの違いを、商品同士の間を説く「商品の自己関係」とそれを人間の意識に与えられた物性的性格として読み替える「価値表現関係」の違いとして把握する(飯田、前掲書)。たしかに、価値形態論において異なる二つの論理が存在することを商品語との関連ではじめて明確に指摘した点で飯田の論考はきわめて優れているが、「自己関係」と「価値表現」を「明確に区別され」うるものとして捉える点で疑問が残る。というのも、飯田が「自己関係」だけを見て取る第三段落においても価値表現に坎する端緒の規定が含まれているからである。じじつ、飯田がいう「商品の自己関係」の叙述においても価値の表現が言われている。飯田の理解では例えば貨幣形態の現実的な、われわれの主観的意志とは関わりのない社会的力を捉えそこなってしまうかねないだろう。なお、山内清

も価値物と価値体という誤った区別においてであるが、飯田と同様に価値形態論に二つの論理が存在することを確認している。山内、前掲書を参照。

(10) なお、この「回り道」をめぐる諸解釈については、福田泰雄が、①価値表現のメカニズムとして捉える久留間らの解釈、②松石勝彦、真田哲也らの第三者すなわち抽象的人間労働への還元説、③武田信照らの具体的裁縫労働の抽象的人間労働の実現形態への転化説の三つに整理しており、福田自身は、「回り道」を「裁縫労働の織布労働への等置による裁縫労働の人間労働一般への事実上の還元」として捉える（相対的価値形態の内実―価値の実体と形態―）『一橋論業』第九六巻第二三号）。飯田和人もほぼこれと同じ解釈をするが、それに商品の自己関係の論理を読み込む点で異なる。

(11) この *plan* を「それから」と解釈するのか、それとも「そのさい」と解釈するのも大きな論争点の一つとなってきた。本稿ではこの点を決定的に重要な点だと考えるわけではないが、内容的に判断すれば「そのさい」ととるべきだと解釈した。というのも、後で見られるように、「回り道」における力点は、最初に裁縫が人間的労働にされるという点よりも、むしろ価値関係に置かれることにあると考えるからである。

(12) 「精神」はそもそもはじめから物質に「取り憑かれて」いるという呪いをおっているが、この物質は、運動する空気層、音、要するに言語という形であらわれる」（H28）。

(13) 平子友長は「社会的自然」を「社会的関係規定としての形態規定の転倒した現象形態としての自然」（平子、前掲論文、一二八頁）と規定する。たとえば、資本主義社会においては労働が特定の社会条件のもとでのみとる価値形態があたかも「自然秩序」のように表象されるが、この場合の「自然」が「社会的自然」である。「素材的自然」と「社会的自然」は「現象の表面においては『わかちがたく融合』しており、『一つの自然』として現象している。だ

からこそ、それは、現象を無批判的に前提してそこから分析を出発させる者（認識における受動的唯物論者）をして、ブルジョアの生産様式を生産の永遠の自然形態と誤って観念させることになったのである」（前掲論文、一二九頁）。

（14） このようなマルクスの「実践的・批判的」方法については拙稿「マルクスの〈唯物論的方法〉について」『唯物論』東京唯物論研究会編、第八二号を参照。

〔学外研究者による査読を含む審査を経て、二〇〇九年三月十六日掲載決定、同年五月十九日掲載号決定〕

（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）